

戦後 70 周年
～あなたが知らない日本の戦地～

1A133111-3 高崎哲次郎

あなたは戦地と言ったらどこを思い浮かべるだろうか。沖縄だろうか、硫黄島だろうか、それともサイパンだろうか。それとも戦地にはなっていないが戦争の悲しみを象徴するものとして広島原爆ドームなどを思い浮かべるのだろうか。しかし日本の戦地は果たしてそれらだけなのだろうか。戦争に大きく巻き込まれたのにも関わらず未だ戦地として認知されていない島がある。70 年前日本のために戦い、多くの兵士が命を落としたにも関わらず現代を生きる日本人に知られていない場所。高橋ゼミ戦後 70 年企画。本当の風化とは何かを考える。



小笠原諸島父島。聞いたことはあるけどどこにあるか分からないという人が大半ではなかろうか。父島は東京から 1000 km 南にあり、アクセスは週に 1 便出る小笠原丸のみ。片道 25 時間かかる。戦時中激戦区硫黄島への物資の中継島として役割を果たしていた。地上戦は行われていないが空爆の対象とされていたため今でも当時の戦跡が生々しく残っている。今回は父島の戦跡ツアーの第一人者であり自身も戦前生まれの田中さんに父島を回りながら取材をさせていただいた。

以下に取材を通して知った父島の戦地としての当時の様子、そして本当の意味での風化ということに対して考察を述べる。



取材をさせていただいたのは8月16日、目も開けられないほどに太陽が海をギラつかすこの日は終戦記念日の翌日だ。「さあ、行きましょうか」と言って車を出した数分後、田中さんは道路のわきに車を止めた。私の目に入ったのは山の斜面にぽっかり空いた穴だ。



「これが当時の発電所です」 そう言った田中さんの言葉を一瞬理解できなかった。

「この穴が？」

「そうです。戦後山を削ったので断面図だけになってます。」

説明を聞いてもこの穴が当時どのような発電所だったのかイメージできなかったがとりあえず田中さんが発電所というのだからそうなのだろう。ちなみに以前ここを通った時には知人に「防空壕」だと説明されたのでそう思いこんでいた。うわさを信じてはいけない。またもう一つ驚いた点がある。それは戦跡が一般道の脇に当然のごとくあることだ。戦跡というのはもっと仰々しくまるで観光地かのようにになっているのが普通だと思っていた。父島では日常のすぐ隣に 70 年前の戦争が影を落としており、逆にそれがここが戦地であったことを感じさせなかった。戦争とは今の私たちからしたら「非日常」であり、父島ではそれがあまりにも日常に溶け込んでいたからだ。



また少し進んで田中さんは車を止めた。山の中に入るとのことだった。山に入るなり大きな壕が目に入った。私でもその壕が当時大きな役割をはたしていたことが分かる。それくらいの大きさだった。



「ここは父島から大本営に電波を送受信する重要基地だったんです。」

なるほど、と思った。山の中にぽっかり空いた穴はどこか異様な雰囲気放っていた。ちなみに壕の両脇に見える板は当時の防塞扉の名残だそう。四重になっており火炎放射や銃弾から耐えられるようにしていたそう。そのことからいかに重要な基地だったかが分かる。



中は迷路のようになっていた。真夏にも関わらずひんやりとしていた。ぽちゃ、ぽちゃとどこか遠くから水の落ちる音が聞こえる。足元はぬかるんでいた。

「ガイドなしじゃ一度入ったら出てこれない」田中さんがそう言った。



これは罫子（がいし）だ。罫子とは電線をかけるためのものだ。僕は最初「お茶碗ですか？」と聞いてしまい恥ずかしい思いをした。壕の中にあるので欠けたり汚れたりすることがなく綺麗に残っている。しかしたずらによって壊されてしまったものもあると言う。

「そんな輩はきっちり懲らしめてやりましたよ。」

田中さんは戦跡ガイドでありながら戦跡の番人でもあるのだと感じた瞬間だった。



やはり機関銃などの鉄類は劣化してしまっていた。どうか壊れずに後世に残ってほしい、そう思った。



これは当時の水道だ。上にある瓶も、70年前から、動いていない。



壕を抜けるとそこにはジャングルが広がっていた。真ん中の木に黒い点のようなものがあるのが分かるだろうか。これは銃弾の跡である。貫通後そこをふさぐように成長したようだが穴はふさいでも銃弾を受けた傷は消えていない。最も「戦争」を感じた瞬間だった。



道を進んでいくと生活の跡が当時のまま残されていた。



70 年前も醤油はやはりヤマサだった。我が家はキッコーマン派だったがヤマサ醤油も使ってみようと思う。



これは旧日本軍のマークが入った陶器だ。歴史的価値があるものをこんな道脇においていいのかと最初思ったが、このようにおくからこそ価値があるということに気づいた。軍人は私たちと同じ人間で同じように茶碗に飯を入れ、同じように食べて生きていたのだ。

○取材を終えて ～考察～

・取材を通して感じたのは

想像以上に戦地だった

ということだ。とにかく戦跡が当然のように当時のまま残されている。私は広島の前原爆ドームに感銘を受けすぎて一日丸々使ってしまい、宮島に着いた瞬間に鹿と写真を撮って帰るという経験をしたことがあるが、父島でそれをしようもんなら季節が変わるレベルだ。ちなみに、サササッと見て回る感じでも全部の戦跡を見るなら一週間近く必要なそうだ。今回私が見たのはごくごく一部だったということだ。

これだけの戦地がなぜ一般に知られていないのか、という疑問を抱いたが以下のような答

えにたどり着いた。「父島が取り上げられていないのではない。一部の戦

地だけが取り上げられているのだ。」

日本中にはもっともっと戦跡が残っているのではないか。考えてみれば東京だって戦地だ。どこかみな戦地と言ったら「広島」「長崎」「沖縄」を思い浮かべそこだけで戦争が起きて

いたかのように考える。今回の「戦後 70 年と風化」というテーマを踏まえ考えると最も風化しているのは戦地として思いつきもされないところのことではないか。決して教科書で習った地域でだけ戦争が行われていたのではない。日本全土で戦争と直面したのだということを決して忘れてはいけない。私が今この記事を書いているカフェも、これを見ているあなたが立っている場所も、70 年前は戦地だったかもしれないのだ。

★余談・・・

このあと僕はダイビングをしたのですが父島では海の中でも普通に戦跡がゴロゴロ落ちています。



ダイバーの間では大砲と呼ばれていますが、真偽は謎です。



すごいサンゴ化してますがおそらく鍋です。



これは兄島周辺のポイントになります。



今は魚の住み家になっています。



途中で謎の筒を発見しました。ガイドさんには火薬を詰める筒ではないかと言われました。



「5/11 可 S11/16 可」 と書いてあります。意味は誰に聞いても分かりませんでした。

以上です。みなさんもよかったらぜひ一度父島に来てみてください。